

## 「しつけ」について

時には厳しい、明治生まれの祖父の姿を思い出すことがあります。小学校1・2年生の頃の遠い昔のかすかな記憶です。

我が家に遊びに来た友だちの靴の脱ぎ方が悪いと、「誰の靴だ」と一喝。その声に気付く、慌てて靴を揃える友だちを思い出します。もう一つ、敷居を踏んだりすると、「親の顔を踏むのと同じ」などと言われたことがありました。

他にもあります。新聞紙や本を足で踏んだりすると、祖父に「目が見えなくなる」と脅かされました。後に分かったのですが、新聞紙や本の文字は言霊(ことだま)です。魂が宿るものと古代から日本人は考えてきました。子どもなりに、目に見えぬ「恐れ」が先にあったような気がします。

祖父は、言葉遣いやマナーの悪い子どもがいれば、当たり前のように叱っていたので、近所の子もたちから、「おっかない近所のおじいさん」と思われていました。

現在では、近所の子もであっても、マナーの悪さを叱ることなどできなくなってきました。その代わりに、学校が本来家庭教育の重要な役割であるあいさつ、返事、言葉遣い、礼儀作法など、基本的な生活習慣を身に付けさせようと指導しています。

国民教育の父と言われた森信三先生は、三つの『しつけ』が真に徹底すれば、もうそれだけで人間としての軌道に乗ったようなものであると明言しています。それは、

- ① 「朝必ず親にあいさつをする」
- ② 「親に呼ばれたら必ず『ハイ』とはっきり返事をする」
- ③ 「はき物を脱いだら必ず揃え、席を立ったら必ず椅子を入れる」ことです。

『しつけ』の「躰」という漢字は、「身」を「美」と書き、「身なりを美しく整える」と解釈できます。広辞苑では、「躰：子どもなどに礼儀作法を教えるにつけさせること。また、身についた礼儀作法。」とあり、日本人にとって「躰」とは、人として、身を正しく美しく整えるもの、ひいては、心を美しく正すものという意味に通じます。確かに、きちんとした身なりで、しっかりとした礼儀作法が身に付いている人からは、心の美しさを感じます。そしてこの礼儀作法は、一朝一夕に身に付くものではなく、長い時間をかけて、家庭で丁寧にしつけられた結果、身に付くものです。

『しつけ』には「仕付け」という漢字もあります。洋裁や和裁で「仕付け糸」を連想します。仮縫いをする時に、細い糸で型を整えるときに使う糸のことで、この「仕付け糸」を使つての仮縫いがいい加減だと、立派な製品は仕上がりにません。細い糸で、まんべんなく丁寧にかけることが大切です。そして、製品が出来上がった時に「仕付け糸」は取りはずします。

「躰」も、この「仕付け糸」と同じ意味をもつように思います。何度も繰り返し、正しいことを教え、間違いを正し、自分の身をしっかりと支えられるような「躰」が大切です。

「稽古とは 一より習い 十を知り 十より返る もとのその一」  
千利休

稽古というのは、先ず初めの一步の基本的な部分から習い始めて、順番を追って最後の十まで行く。そして、そこで終わりではなく、もう一度初めに戻って稽古しなおす。すると、最初は気づかない事も分かるようになる。

耕人塾では、指導方針の一つに「日本の伝統文化を体験させ、自然や郷土を愛する心を育て、礼儀作法を身に付けさせる」ことを掲げて実践しています。そこで毎年、耕人塾の運営委員で茶道表千家仙台吉祥会会長の石田邦子先生から、茶道体験とご講話をいただき日々精進を重ねています。

一から十まで習ったとしても、またはじめての一に立ち返ることで、習得したことに磨きをかけたり、見落としていた箇所を新たに見つれたりすることができるという教えです。つまり、一度さらっとお稽古をただただ満足するのではなく、何度も復習することで体得していくことが大切であるということではないでしょうか。